繪本三國妖婦傳 上編 五

へ13
2892
5

へ 13
2892
5

繪本三國妖婦傳巻之五

目録

悉達太子佛道成弘む並悪狐花園に眠て傷く
悉達山を出あの並説法の圖
悪狐病を象る圖

昭和九年
文明三月
購入

義陽歎て姫を太子のために棄ふ圖

棄及忠死並名醫耆婆義陽夫人の脉を診ず

忠臣棄及太子に諫る圖

耆婆義陽ゝ脉を診ずる圖

耆婆門に閉慎の圖

釈尊説法の図

繪本三國妖婦傳巻之上

悉達太子佛道城に入給ふ

抑耶竭国は大国にして廣く境の際を尽し帝天
帝釋大王の夫人摩竭国の大王の公主にして幸福
天王の妹なり中天竺加毘羅城の天竺淨飯大王
とは近親にてましまし給ふ淨飯大王の宮太子
に蘇婆悉達と申奉て三ツ月の懸胎を昭王二十
六年甲寅の四月八日の夜は地神又代鶴鶏草葺の合
宮八十三百六十五百七十六年にあらく摩耶夫人の
出腹より誕生ましまして地神抱き天上天下唯我独

踏と喝くのひしが出幼年より智恵聰敏ありて仁慈の心
始めく七歳より書籍を学びて九歳迦まで到達する十
歳の時法華と力角し給ふ城外へ投ぜしに又八九歳
の鉄城射透しのみ也帝王より綸旨を給はり文殊
の竜宮斜なるべき方に義造太子始めく王位城厩
に生せるひ此万民城正世に降伏実に帰せしめんと
城のそとしのひ十九歳ゆゑて二月八日王宮を忍び
出て檀特山に入給ひ苦行城をしに二十二歳にして鷲峯
幕ゲ変に遷る三十歳の時摩竭陀国菩提場に到
落成なるく二月八日明星の出る時廓然として大悟城

示し給道かさせのひ山城に深層の教城を広くあ
民を教化しのふるを須達長者金城布て祇陀園城
賞寺城建く仏に捧る種屋精舎と云号く狗耶尼国
まて海辺和ゲあめに経を説揮山にて阿耨陀王
の為に法城説のふ城和として一流かを弘しく
一代に十九年ゲ号三百余座の説経摂実那二の聖教
くとば釈迦牟尼仏と称して今この巻の後までも
こゝに仏名の徳と仰ぎ奉る抑も釈迦仏歴劫修行
の昔海辺とは肉縁にて釈迦仏誕生の時
如

魚鱗疥を象る宮
三國妖婦傳巻之七

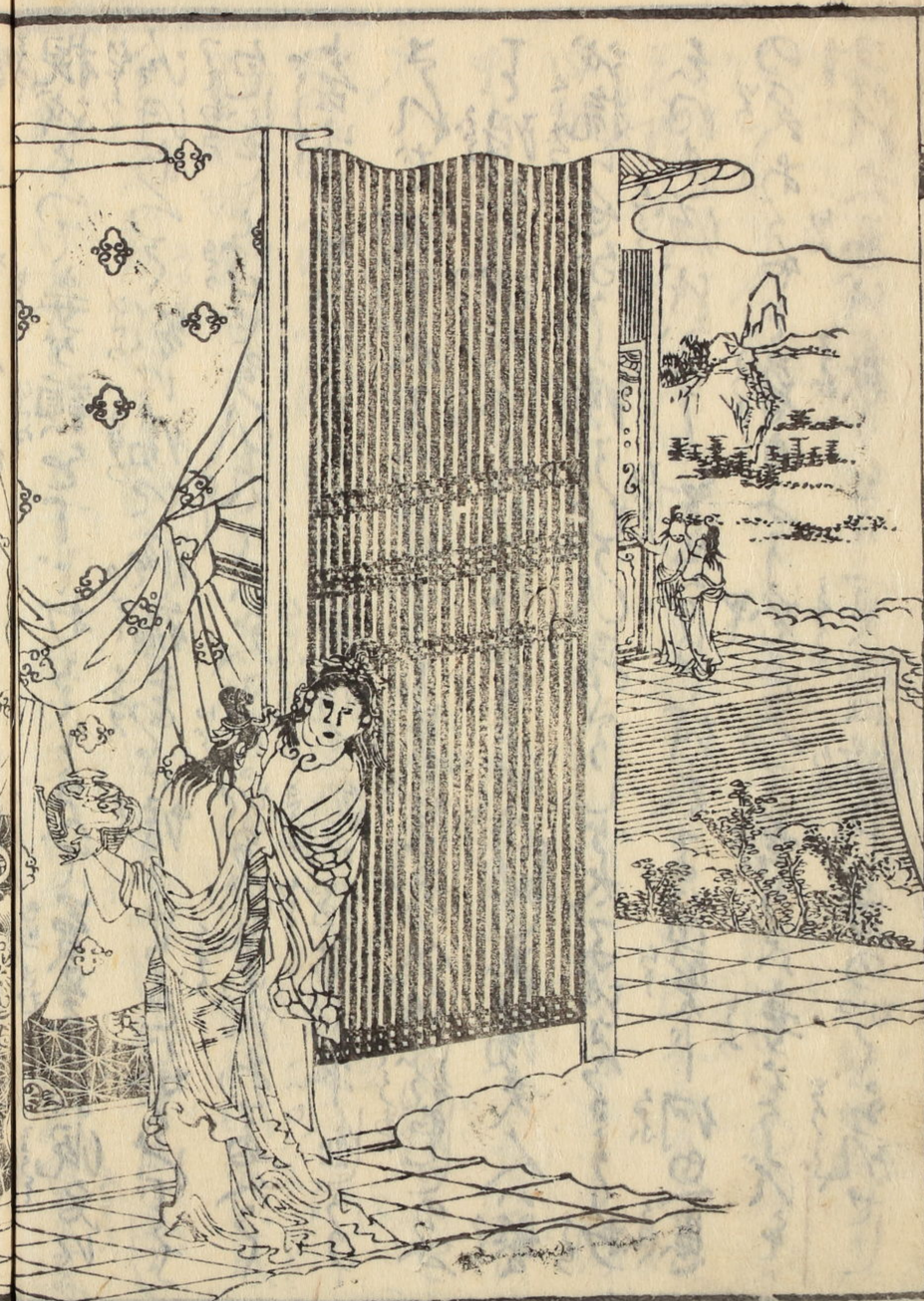
るこのみ現世太子八宗を兼学の師のけ[illegible]
なれば謂るにたりて志だむ〳〵教門せ〳〵を教迦佛法法
のむ〳〵法をわかり宗門をきはめるふぞ[illegible]大子の
聰明なるをば仰又の命城をんぐ[illegible]法城をうけ
心安義城をもつて[illegible]法成城を恵こ嫌こ賢者の
望くあるしるを元義陽を人城法のひてうう日夜嬉
法に流り光陽が媚に魂城宗を追〳〵楽が勧るに通ひ
水道の学勤のつく〳〵ハ仮初めを意情の行ひ
ちく中又学毛天法朗大[illegible]勅あも者妃仰又幕府
をの学門を忘をたく[illegible]に来ひ法に長欲を日が遊

ての遊楽かが〳〵[illegible]法門蓮華[illegible]
九月中旬太子ハ義氏園城遊覧あるとて[illegible]
の宮〳〵[illegible]又紫宸つをらを花[illegible]
見とてをの人に[illegible]の義氏ををして孤をを迎
を[illegible]をく眠をく人言を知ぐ〳〵外一孤[illegible]
孤を蒙[illegible]城[illegible]しかくをすむとして古をにくあるべ孤
あるあをを対をく[illegible]をの仏に畏を〳〵弓に義城お[illegible]
擬的城定光奉城かあ矢を[illegible]孫らひ[illegible]
孤の新城射剣を〳〵矢は園氏中に[illegible]る孤ハ大に
ほど孫を[illegible]城[illegible]を迎来〳〵[illegible]

は[illegible]城婦せうひをぎ[illegible]奥の[illegible]て
帰らせのみ[illegible]ものハ今日の孤城対面[illegible]のちハ
花陽夫人に[illegible]せく奥ぜんとの城[illegible]
此孤城にて[illegible]陽が正[illegible]
まし[illegible]太る[illegible]
入[illegible]凡の[illegible]に[illegible]城[illegible]帛[illegible]て包[illegible]
冥ひの[illegible]に義陽[illegible]妻今[illegible]の恩遇[illegible]何
[illegible]城思ずとは[illegible]ど[illegible]に[illegible]て逢[illegible]に[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]城思ひ[illegible]
のあ[illegible]いまど[illegible]一睡の[illegible]に正[illegible]用[illegible]

[illegible]て妻が額を下ど打[illegible]て[illegible]ハ泥[illegible]に
冷汗あつく[illegible]に[illegible]痛[illegible]ぶ[illegible]ばかりなれば
包[illegible]せのひ太[illegible]ハ夫人が[illegible]ひ[illegible]城[illegible]
[illegible]せ[illegible]義陽が[illegible]ハ[illegible]
されど[illegible]ハ[illegible]義陽夫人城[illegible]
[illegible]に[illegible]ハ[illegible]
城[illegible]ら[illegible]が[illegible]
[illegible]ハ[illegible]城[illegible]
の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]

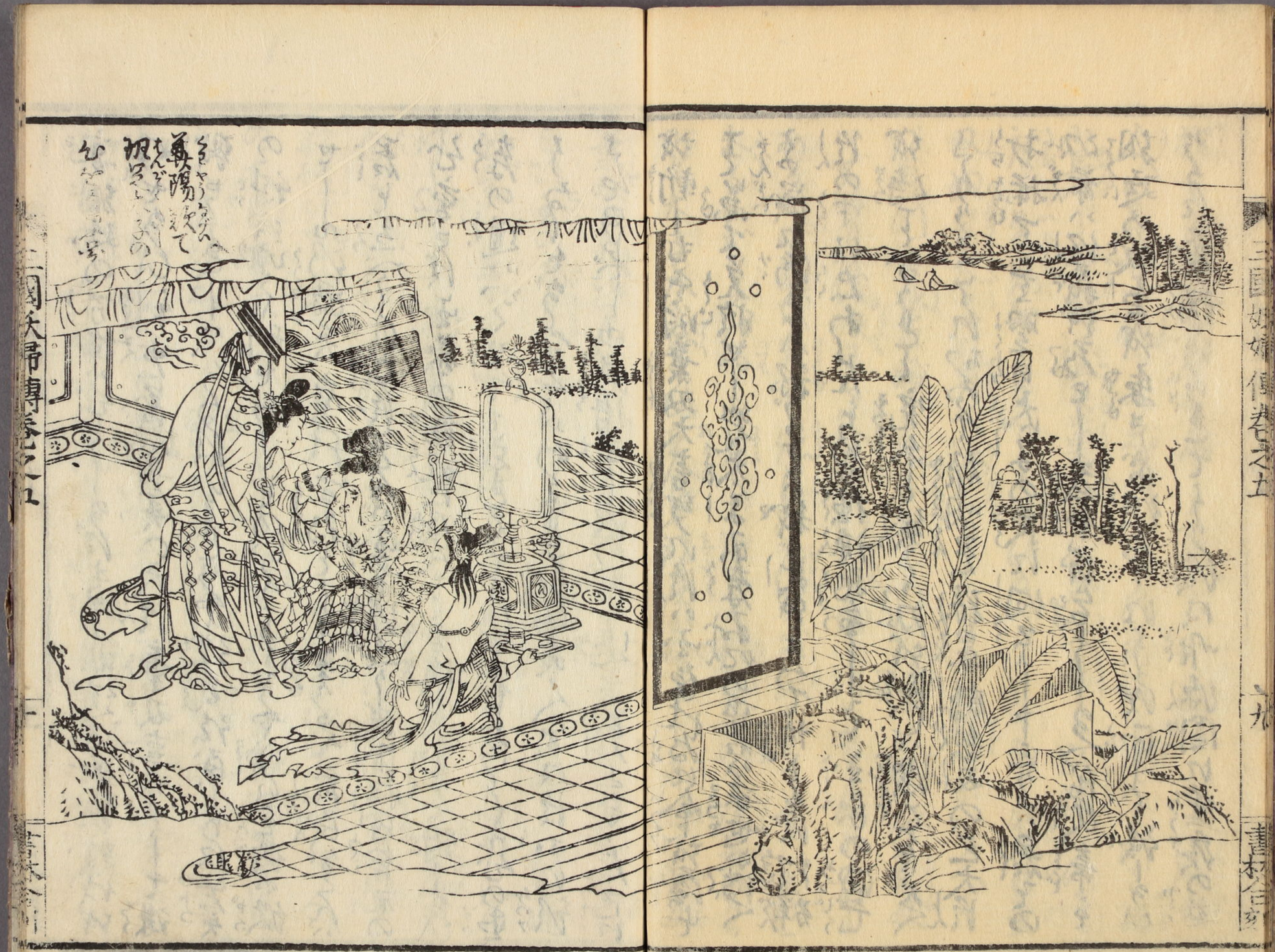
襄陽夫人
病死れ居



を取て入らせのひ出陽夫人に捧げて見せたまふ
深をあるなれば何と氏分城主の
あるべきやかに知る事不審も
と思ひ出せば人若〳〵見えぬ者
まして此うもくもくもくに書
もぐりて又泣沈む粉ひ
出る用紙を封雲にうくつ
うおく雪の風にも敷る
なるべきの用に敷と
なるべきの用に敷と
敷りなるべき答書の
業じ思ふとあるとを慰めのひあ〳〵賢城をあぎて
まと泣と泣笑て出分城主主の傾城傾国人へ
服紙に思ふて法せ次第
藥及恵花英名医者波安真陽夫人の脈を診す
去程に泥に大ハ花陽夫人の以書にも重病法成
そさんく深うひう愈ぞる城合とのひ何かとして
花陽城慰めんとて好めるなるべと云とかうり
りるなく色花ハ殺城を好せのひ最る紀法に碧城裸
せ出分持城孫るとのあるべ
帰時に斬害せ一ち下民に

捉て首切刑させ庭前に刑罰せしめ花陽夫人
人にうんせて抗しめ志ゐたりしかども花陽が勧にしたがて孫
が長じ出家し貴莫大なるをバ又幸を送雑おんく
後く呉見おしのぶども弟ひまハざりるゐどこ大臣葉
双胡兄太子に見へ孫云ふ〜なるとも数度かちつくとも
うるゐく嗜にぬきてゆ無かあひ長ハ逸のび葉双
ハぜひ出ん城改さを父幸れ城も孫ちなんをのを
ある時必死城完く法度れ慶嬉城を出ゆ日に出法
太子のを孫行く見へを出ゆく見へを孫争ひる
かぞ大る大が怒のひ矢今法度が命じて即時に葉双

城斬むを時葉双大喜謀ひて孫ハ家れるに命城廃を
て第て呉城せ〜処太子ゆ孝ゐの宮ハ未也が行く
る嚴に行ゆ人孫ぐく〜ハ我ぐ死城とて捕とゆ孫
氏の中にたゐんとものハ極孫死争〜く家の滅亡
城寄てをるとて完ゆく矢く刀城民ハ潔こそんく
ゐりることにおゐて胡明五孫晏麟岳双の三大臣
ゆ捕て主聖日太子の文に何そ〜中ニりるハ孫をの
孫ハ紀義城考ゆ〜岳ゆ城宮ゆ文幸を
胡廷の改ゆ城乗さ物河事ハうゆ正〜孫〜ハ
うるに義陽城ゆ〜ハ孫国に晏疫の逆

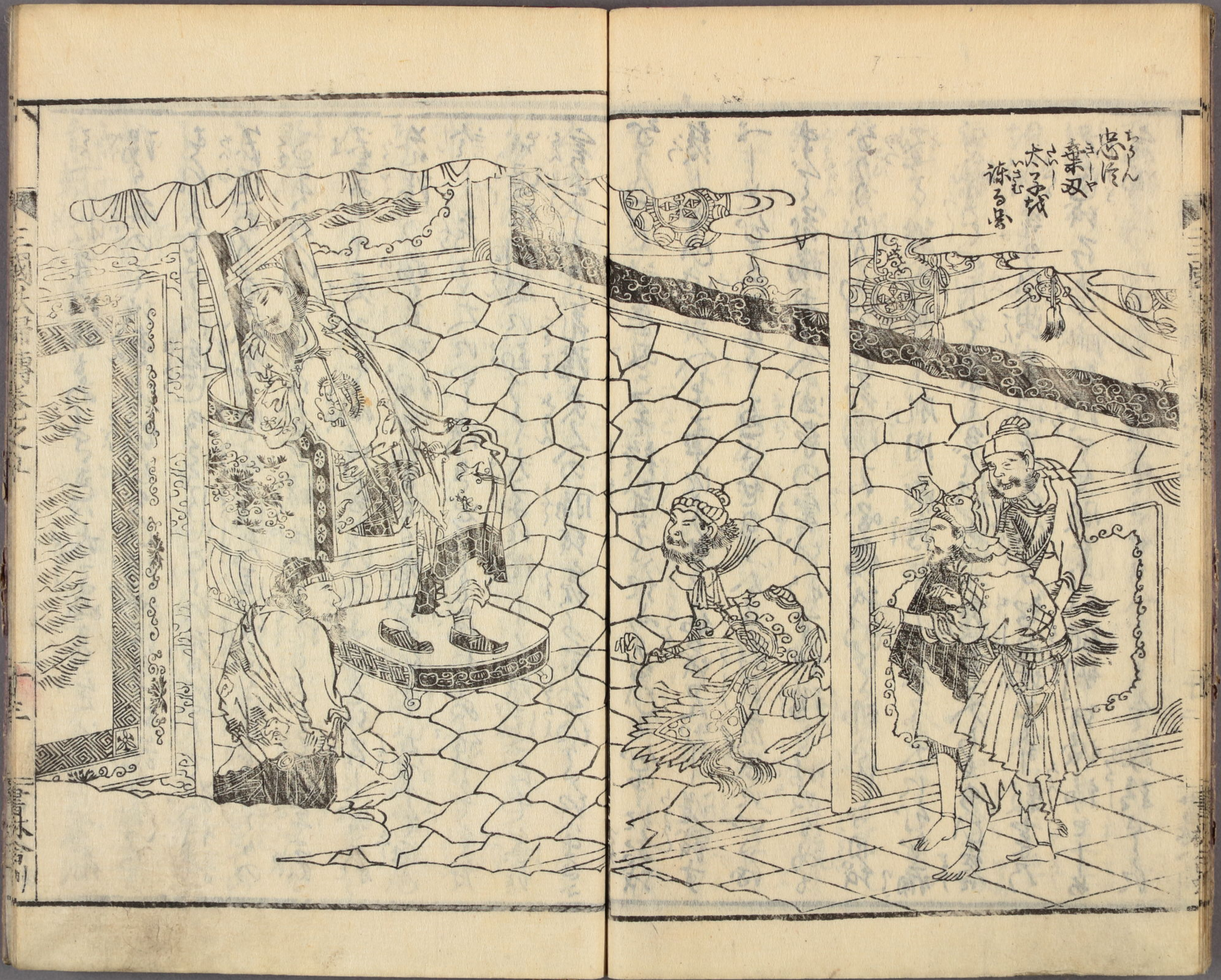


朝廷の万機ハそこしなはす邪道の舉動数ずる
好せの乱り忠義篤実の大臣棄奴章なくして誅
戮せられしハいろれいともりや佞者佞臣とのみ言を
の科なく刑せられそのいくそくそや数れぬ数
せし此沙縣天魔氏和ねとしてありがてえ紀氏かんが
君も立へきれたがくかんが世も伝へてハ不傀録合紀の
むうばば国家の動乱に及んと以此文帝へ対しみひ
奉の道ハかくまでもにきまうもすしや志づく此世の至
りみすもあるまでハあるしに花陽夫人などば性ホに蘭
さもあらず此を持ぬしれのもちハ退て更に斯て人己に

棄奴が死をつんあがるにハ身をも顧ず諫言をなす事也
これ悪の為君に此名え上げて誅戮しのぞしと佞遠
言葉ば日し涙とものにやらるへ太子一くだし
理りけして慕をあて黙然として居ぬひしから此蔡籍が
途をる云捨てばむてへのみ花陽此時一家の門を
姫御を軍なくりしが太子にすがり派なむせび今三人
の大臣棄奴が誅せもしも此て邪もを君が諫めのなりし
く嘉が志ざしく誠けりどもと然を傍て云出しくる
その三人の内麟丞奴ハ争をたく天男の欲之にり
無吾禁めして水の流るゝどし楽の れを出し

てやられといふ日にて玄蕃の詫ざしると覚へしに聚柔
に我とらる大人が云ひける一統に深かりしく卞之妾
は悪うる事末の世のこらずうけに入れんとの心ある道を
も楽らく悪げのるんとよ口惜く次第に身くもしや聚我等
にかりおち説ゑさせのよるのか所の人まても命ぜられ
が首を修らる綴筆く洛しのたしいるそとみとても
爾人へに肌が身ましよし思ひもうたと耿たれて涙る
おぞ太子のふるこく汝が者も為すとおなほ彼ありしけを
とをいかで汝が訴けつるゑべきさるふても汝が親のごとく
するは三人ともに云汝同所の世ちん孔躍が出るすべくば

なりんとく麝岳取こそ権勢あれかしなと心中に悪我
終しかひ此三人を事にうせてて紹我凡出し讒戮す
べしと心よこ乳らく色さしせのふ今ハ群臣民にいふ涙
まで華陽夫人御家の害我好すが謀を悩むるめも
なかりけり然るに華陽不図病我もちく臥しが貝我
遂て数日減し肌肉落瘦せしかバ太子大に心を痛
め指くとして衆ともがれかふし寝所へ入らせのひ容
体等のひ典薬七度亦倶子智叔均を于数家乃
大医我召て肌我診させ服薬ハ配剤我緩緩せしむ
しうぎ前途につゐで宴に華我召させのへどもを勧路されに

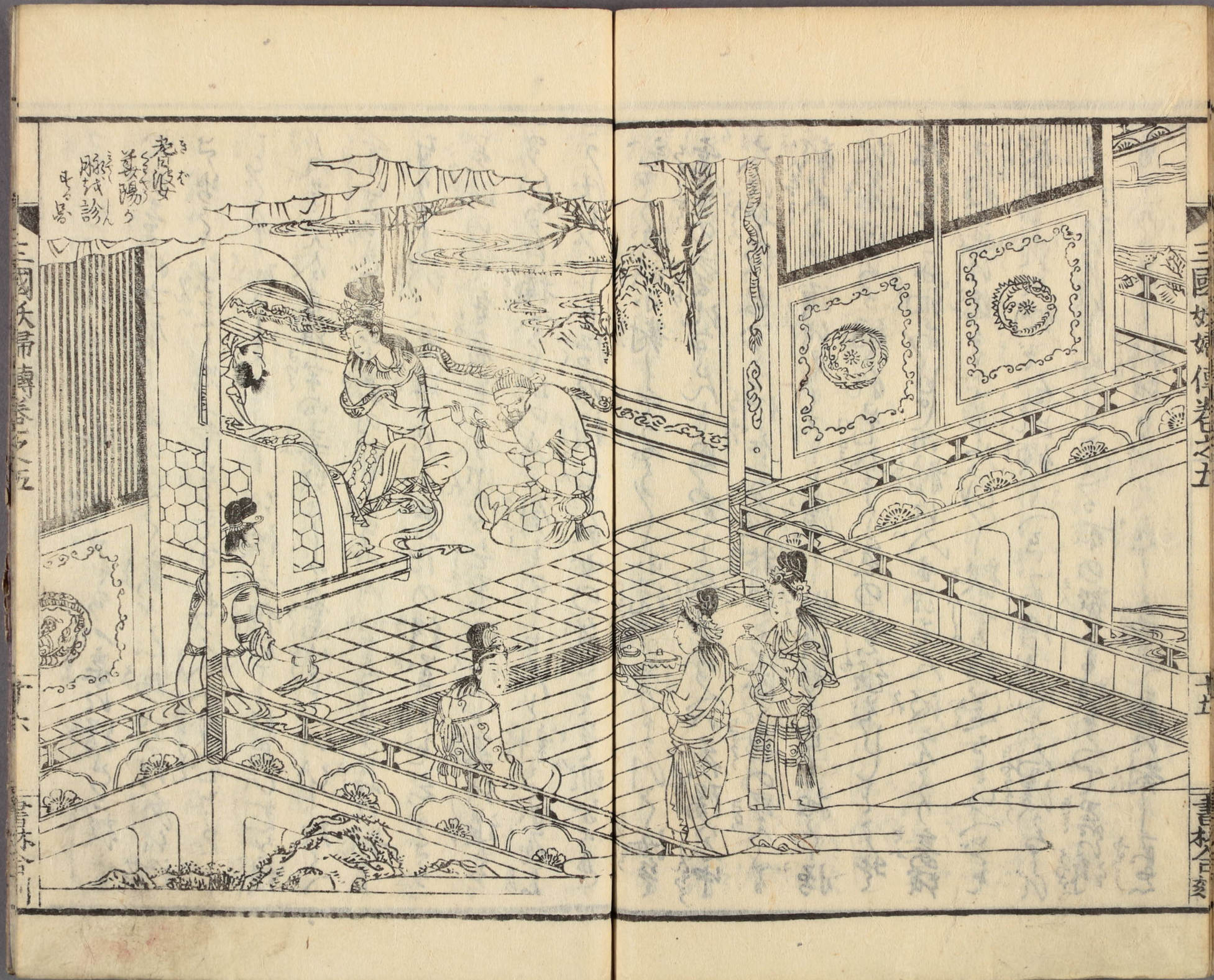

ちうん
忠信
きーしゃ
義経
さいし
太子城
いさむ
諫る所

こゝに於て群臣も力およばざれバ太子妃ゟ是非なく花
陽が病の事を案じ朝夕ひそかに侍女嬖妾が勧めにより
されども更に鬼王のまどひにして瘧疾とて数代の
名医あり王叔和といふ賢者にて大医統正なりしが此人の
名医ありて今に其を解すべき残りといへども此事に起
蚤にして天下の術を極めて太子に仕へ出仕して脈を
花陽の病を聞て白ら召されて胸脈を診しく出仕して脈を
診し其うへ大にもどきを思へどもたえがたき程にて其を
退き別殿にて太子に謁し人を遠ざけて密に
言上しけるハ花陽夫人の脈を窺ひ候に是ハ尋常の

人間の脈にあらず元来生一国の究めて正しき者にあらず
毎日は昼夜の勤めを怠らず漸々に遠ざけらるゝて貌る
べし恐らくハ是れ妖孽なるべしと存じ上まつると涙を垂り
ながら申せバ太子是を聞て甚だ立腹まし顔色を変ぜらるゝ
人の心ハ測りがたきものなれバいかなる名医なりとも見ぬ
脈をとりてゑつ生きハ是まで脈を伺へ医師脈を診されしに
かゝる事を誤り診るハ己が学ぶ所の人を惑はし医の論を
とるやと耆婆ハいかなる故か是を汝が家の
おしへも勤めざる命のみ恐れ入てあらんかぎり
家数代医術を業として何で脈を違ふべき

ぶきゝ代て君の孫城倉慈城を殺りて大城思こざる
べきゝ人なれ腸はすでに天より動あり大雑色一襲の
中に錦袋城を入て平とし病に犯さまて医師を呼
高敬の腸は人なるの腸とは大に異なり
じ時に高じ高じるまゝ太るはゆるのうちも敵岳双
ゞ孫丹て荒陽城るに入んと兼て脊婆に医合せし
ものるんと鏡ひのゝ恐ゝ医家の腸論
紙ゞのんゆ稀もおゝゞばゞ返てたまを返て海
流に及ばしと云捨て奥に奥の殿に入るひるゞ荒
陽の病るにこせのひ今日脊婆ゞ腸城診してのち

こそうゞ我ゞ對してゝゝゞゞ流ゞゞゞ海を
高生の変化るんと思ゝと戯をのゝば荒陽ゞん中
大に驚て思ゝども何為るに紙にをて医奥の見ゝる
新笑して濱城ゝゝと流ゝ恐城あゝゝ細ゝ指
て暴医ゞゞ細ゝ見ゝ金ゝ意の意ゝだしとゝ
ねゞゝゝゞ細ゝ細ゝは龍に入ゝゝん彼えゝゝ高城
ゝん意に為ゝゝゝゝゝゝゝゝ毅書城送るといゝども
城ゞゞて何ゞ見れ頭ゝゝゝゝ浸るゞゞ
ゞ濱城るゝゝゝゝゝ将城此り浸るゞ
ゝる所の毅書城をゝて君に濱
ゝるゝゝゝゝゝ城をゝて君に對ゝゝ

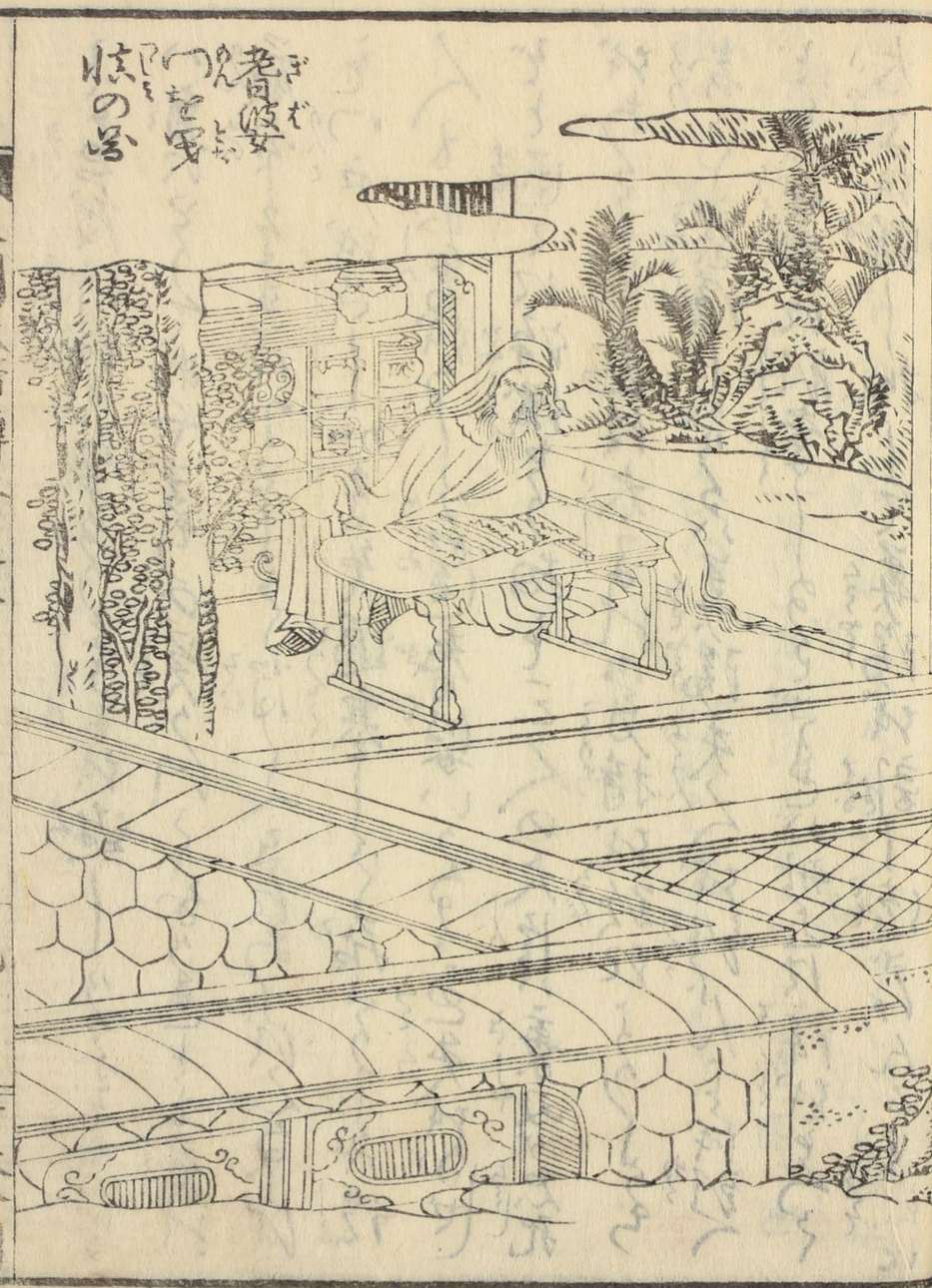

老婆婆
姜陽う
脈を診る

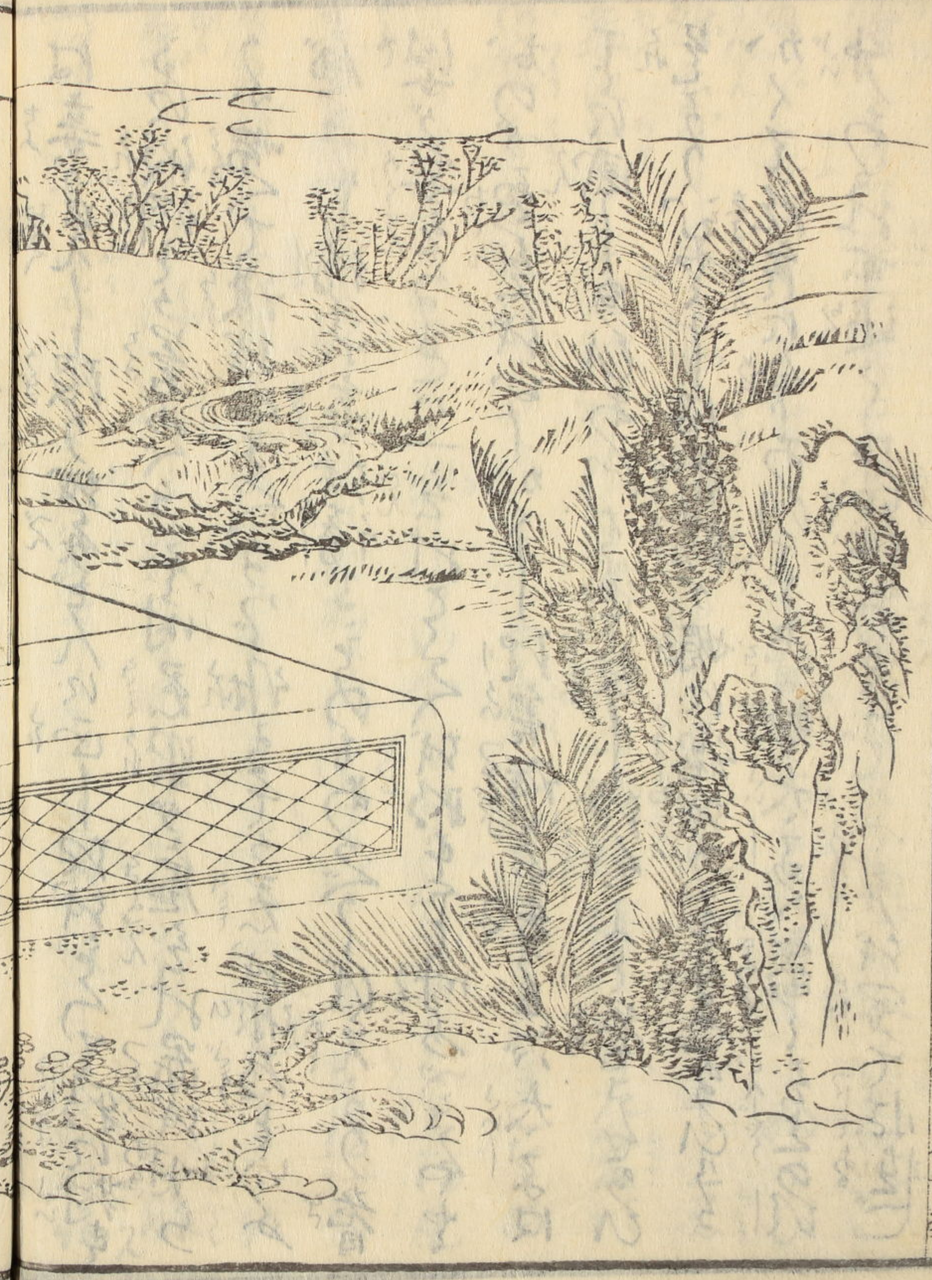
不義大惡は彼義を君の色さとせの妻に落とる殺害
の文章は女靡しに比べ恐るべく高がん訪れるば西は汚
さ絶えくなんとと思ふや色をかるもつ人面獣心ちとどし
とぐ白ひ孤しめ者もし妖彼奇怪のことに思ひ怒を殺
んを欲人今日は幸ひ妾は妻さして畜生とハいひたくへ
畜生なるもバとて君の罪しの妖知るるぐ君に對
なりても彼ハ元紙うんか君臣の義をとたつぐろ
君臣の義を育をし楽ぶ元ふ妖怪しく妾は退き
のひるば捕へくおのもぐ獣をのとせんと射る不毛ち
う落もぐも捕れ新をうれ女の分ことを非かるを

男子の如かもあるなくばまぐらもあんをの妖を滅と
うに仕ばび法しづむあうさ西妖出ぐ狐を大きな仕
かぐ法ととをもりぬ仕獣ひ西妖狐ひのひ一に老婆
が姿妖出ぐ一石く色妖狐のひうもち情怨
の形相あうとを恩怨所新のごく獣医術をうを
妖出ぐ科妖出ぐ接色の夫人妖毒ぐ殺うしあ
除うをぐとの係器盧を妖うつて狐術ト上妖歌
く恩ちをのはなるに接色とんやあく彼石書て
ぬうふ薬妖ぐく法妖ちもぐうもぐと言ふかで元陽夫
人ふむのうち太子妖術うしあをうと密にうつび

張とうに張が為ハ君の恩ハさらなれど今楽毅張
のごと妾ども夫人こと銀瓶せし姫さび
張云ふ又もや妾張が
妾に先て医張張ひとの後編張うけん君ハ
恩ぶ張に物ものを問ものを
しの出まるべきうと地ものいやさうに事ことなる
妾が病とても張張紅とにあるべ遠ずして牛慢すぐ
ものをば先ども青海張ばさせらもと妾と百名ものとば
先張のごと張が婦張張書の正義張あるもの言脈
なりて書せうと思第ものものを船め張医編脈編

は妾が兄張張張ハ張り張矢ビんに正張張とて彩に射を
る張波河とう兄ども妾ものを河兄楽が庵ものに羅張明ら
ふ喝くて張張くるくるのごと張張張明ら
屋ものや張張ば妾張張張るものもあるべうびえうう青
海妾が妾ものもバ一ものれて
おのが兄ものを張ものかくし
ものに風ものひあるものもの長張張ものを妾ものひ
兄ものうものもの花陽が媚に張張ものものものものの
かくて法院に命あるものく青海妾太ものく寡ものものの
弟あるも不遠ものを出法あるものでハつ戸張軍て法院


老婆
婆
岐の宮



と為て作城らるゝを見て城造りらるゝを者共
ハ知にそうてあやまちの罪うけらるゝども君の
厳命をそむこばでとしらく小屋にあがくるべ
をつかせしかを先通塞しらるゝ結ぶ法
人もあ書結らるゝ名匠者共いうるを失はるせ
ぞと通くに泥濘ちり拘をこ人の大臣小業刃ゞも死
城あるを図は大るれ出持城敵ちるゝ
者らく密談しらるゝ義陽夫人城部へ
どを容易に出者しのるをざを出ば陳をつく
太る城賜し拘して義陽城部へ遣ざんをを初に

及ぶ不にちをゝ病に外しらを出ば乱の時
城濠らく事はゝ一ちゝ出家のをを二ちゝ業刃ゞ逃
還城を獄せんをのとおのくゝをにこ見らゝ